2026_0524「ラクウショウの気根」日々の理科 4305 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

まるで地面から無数の石筍が生えたような、不思議な風景です。これはラクウショウ（落羽松）の「気根」と呼ばれる構造で、地下の根が呼吸するために地上へ突き出したものです。ラクウショウは北アメリカ南東部の湿地原産の樹木で、日本でも池畔や湿地に植えられることがあります。小石川植物園のこの場所も、武蔵野台地の段丘崖下にあたる低湿地で、地下水が集まりやすく、ラクウショウにとって本来の生育地に近い環境となっています。

和名は「落羽松」と書きます。秋になると、羽状に並んだ柔らかな葉が枝ごと紅褐色に染まり、まるで鳥の羽が舞い落ちるように散ることから名づけられました。学名は *Taxodium distichum* 。分類上はヒノキ科に属する落葉針葉樹です。幹の根元は大きく膨らみ、繊維質の樹皮が深く裂け、湿地の巨木らしい独特の風格を見せています。その周囲を囲む多数の気根は、土壌中の酸素不足を補うために形成されると考えられており、湿地林特有の景観をつくり出しています。

小石川植物園の段丘崖下には、都心とは思えない静かな湿り気が残されています。乾いた台地上とは空気の温度や湿度までわずかに異なり、足元には常にしっとりとした土の感触があります。その中に立つラクウショウの気根群は、まるで水辺の記憶を地上へ突き出しているかのようです。一本一本の形が異なり、あるものは細く鋭く、あるものはねじれ、またあるものは途中で癒着しています。湿地に適応した植物の「呼吸」が、目に見える形で現れている風景なのです。

（2026 年 5 月中旬／文京区小石川植物園内）